

読書のススメ 世界の古典を読む

名古屋語学教育研究室
服部 茂

読む行為には、その内容の背景となる知識を併せ持つことが必要であることは言うまでもない。教養を深め、さまざまな事に関心を寄せ、自分の知識を増やすことも同時にしなければならない。そこで、その知識をつけ、教養を深めてくれるのが日々の読書である。

現代社会は、インターネットを通じて情報、知が瞬時に手に入る。新聞はもとより論文まで手軽にスクリーン上で読める。もちろん、こういったインターネットを通じての読書にも異論はないが、一方紙の本の読書もしたい。紙の本の長所は、目移りすることなくじっくり集中して取り組めるところではないだろうか。大学時代に自分自身のこと、世の中のこと、将来のこと、自分を取り巻く人間関係のことを考えたり、論じたりして自分なりの答えを求めたりすることは大切なことであり、むしろ考えるべき学生時代の課題である。その過程で、考え方が成熟していくものだ。柔軟にかつ多角的に思考する力を身につけるには、本を読んでも考えることはとても役に立つ。

では、どんな本がいいのだろうか。ここでは、世界の代表的な名作の古典を挙げたい。名作の古典とは、多くの人に読み継がれ、いく世紀を超え、あらゆる時代に耐え抜いた至極の作品をいう。中世から近代までに出版された哲学を中心とする文学、思想、芸術、社会学、経済学等の書籍である。その時代に著された書物は、根本的で普遍的なテーマを論じ、現代にも十分に通用する知の書である。岩波文庫などがその代表的な出版先である。法学、経営学、中国学を専攻し将来ビジネスの社会で身を立てようとしたり、人を束ねる職に就こうと考えている学生は、これらのジャンルの本は必須読

本である。世界の名作とよばれる作品には一度はかぶれてほしい。一人で孤独にひたり読みふけるのも悪くはない。

系統的ではないが、私なりに、思いつくまま英文学に絞っていくつか書籍を紹介しよう。W. シェイクスピア、『ハムレット』(1600)、『オセロー』(1604)、『リア王』(1605)、『マクベス』(1606)、D. デフォー、『ロビンソン・クルーソー』(1719)、J. スイフト、『ガリバー旅行記』(1726)、J. オースティン『自負と偏見』(1813)、C. ブロンテ『ジェン・エアー』(1847)、E. ブロンテ『嵐が丘』(1847)、C. ディケンズ、『大いなる遺産』(1860~61)、『クリスマス・キャロル』(1843)、L. キャロル、『不思議の国のアリス』(1865)、R. L. スティーブンソン『宝島』(1883)、『ジークル博士とハイド氏』(1886)、J. バリー『ピータン・パン』(1904)、D. H. ローレンス『チャタリー卿夫人の恋人』(1928)、W. S. モーム『作家の手帳』(1949) などなどである。もちろん、翻訳で十分である。中には、難解な翻訳書がある。いきなり大人向けの翻訳書が難しいならば、ジュニア向けのものから入り、ある程度ジュニア版で内容を把握したあと代表的な翻訳書に入っていくのも方法である。

文学の良さは、物語中の体験を追体験し、その作中人物を取り巻く関係や世界観を自分のものとし、未体験ではありながらそれらを自分の引き出しにしまい込み、いつでも必要に応じて出し入れできることである。将来、自分が出くわすであろう事柄を小説中で体験できるのである。この引き出しが多ければ多いほど、人生を送る上で有益な知となる。文学は、ものごとを深く考える上で、格好の題材となり得る。例えば、先ほど紹介したE. ブロンテの『嵐が丘』は、成就できなかった恋愛の物語であるが、この恋愛のテーマは世界の普遍的なものでありながら、個別には異質な要素が絡み登場人物の関係性が描かれている。恋愛から発展したストーリーは、その中に潜むさまざまな人間模様が浮き上がり単なる好き、嫌いの恋愛論だけに終始していない。人間の欲望、嫉妬、憎悪、苦痛などが読者の前に提示される。シェイクスピアも同様に人間を考える上でその特性が十分に描かれている世界最大の文学のひとつである。文学を読むことは、人間観察をすることであると

も言える。

こういった世界の古典は、読者の人生において何らかの示唆を与え、考え方を豊かにしてくれる。忙しい日々の生活の中で、ややもすれば情報を読むことに偏りがちな今日である。情報として読み捨てられ、消費される方が多いのかもしれない。それとは対照的に、知識を増やし、深く考える読書は、大学時代に体験しておく知の作業である。幸いに日本では、外国の本の翻訳が大方出ている。読んでいない人がいれば、即図書館に直行し数冊借りて世界を読んでみてほしい。

中国古典詩歌に見える「青虫」

経営学部

矢田 博士

一、はじめに

「青虫」と聞いて、皆さんはどのような虫を真っ先に思い浮かべるだろうか。おそらく多くの方は、キャベツの葉をむしゃむしゃ食べるモンシロチョウの幼虫のような虫をイメージされるのではないだろうか。ちなみに、『広辞苑』第六版（岩波書店）では、「青虫」について「モンシロチョウ・スジグロシロチョウの幼虫。体長約四センチメートル。色は緑色。菜の害虫。また、蝶や蛾の、緑色で長毛や棘のない幼虫の総称。」と説明している。

ところで、中国の古典文献に見える「青虫」もまた、蝶や蛾の幼虫を指すのだろうか。もちろんそれも含まれるものの、それだけに限定されるわけではなく、青や緑色の虫であれば、広くそれを「青虫」と称しているようである。実際、古典詩歌に見える「青虫」を調べてみたところ、やはり蝶や蛾の幼虫のほかにも、いろいろな虫が「青虫」

という言葉で表現されている。本稿では、中国の古典詩歌において、どのような虫が「青虫」と表現されているのか、確かめてみたいと思う。

二、詩歌に見える「青虫」

試みに唐詩と宋詩における「青虫」の用例を調べてみると、唐詩に七例、宋詩に二十五例の計三十二例が確認できる。紙幅の関係上、その全てを挙げることはできないので、比較的わかりやすい例を挙げ、どのような虫が「青虫」と表現されているか、見ていきたい

*

【蝶の幼虫と特定される例】

青虫也学莊周夢	青虫も也た莊周の夢に学 び
化作南園蛺蝶飛	化して南園の蛺蝶と作り て飛ぶ

唐・徐夔^{じょいん}の七言絶句「初夏戲題 [初夏 戯れに題す]」の冒頭の二句である。『莊子』内篇「齊物論」に見える、夢の中で蝶と化した莊周の故事⁽¹⁾を用いて、「青虫もまた、夢に蝶と化した莊周の真似をして、蝶となって南の園に飛ぶ」と詠う。ここに見える「青虫」が蝶の幼虫であることは、明らかであろう。

**

【蛾の幼虫と思われる例】

青虫彫病葉	青虫 病葉に彫り
白鳥篆平沙	白鳥 平沙に篆す

南宋・華岳^{かがく}の五言律詩「遊溪西寺 [溪西寺に遊ぶ]」の頷聯の二句である。「青い虫が模様を彫り刻むかのように病んだ木の葉を食べ、白い鳥が篆書⁽²⁾を書くかのように平らな砂の上に足跡をつける」と詠う。ここに見える「病んだ木の葉を食べる青虫」は、芋虫や毛虫のような蛾の幼虫と見てよいであろう。

【蝗の類と思われる例】

去年稻田荒	去年 稻田の荒るるは
-------	------------